第3回

絹谷幸二芸術賞

才能あふれる40歳以下の若手美術作家を表彰する「第3回絹谷幸二芸術賞」（産経新聞社、絹谷幸二美術財団など主催）の大賞に浅野友理子さん(35)、奨励賞に大東忍(しの)さん(32)、審査員特別賞に松元悠(ゆう)さん(33)が選ばれた。東京・上野の日本芸術院で2月13日、授賞式が行われ、3人はそれぞれ受賞の喜びとともに作品に込めた思いを語った。

出会いと体験を再構成

大賞 浅野友理子さん

「まず日本画の顔料で描き始め、描写したいところは油絵で描く。日本画の絵具の質感が植物との相性が良く、油の絵具とぶつけ合わせることで画面の中で質感の違いを出している」と、展示作品（写真左）を前に解説した。

宮城県出身。「祖母とヨモギ採りに行ったり、秋になると母方の故郷からキノコが送られてきたり、こうした子供時代の記憶が創作の原体験かもしれない」

山形市内の東北芸術工科大に入学。植物の実や種が次世代に命をつなぎ続けているスケール感やその造形に魅力を感じ、学部生のころから植物をモチーフに描いていた。

その後、現在のスタイルになったのは10年ほど前。展覧会に出品するため、その土地に伝わる植物の利用法や食文化を現地でリサーチし、体験を作品に落とし込んだことがきっかけだ。

「興味ある場所に行き、出会った人たちが創作のモチベーションになっている」。作品に作業する人物や手がよく描き込まれているのも、そのときの記憶を再構成させているからだ。

今年は台湾や韓国など国内外の各地を訪問しながら、「描きたい」という出会いを探す1年にしたいという。

浅野友理子《絢い交ぜの庭》 2021年 油彩・岩絵具・水干絵具、パネルに和紙 170×324cm 撮影：嵯峨倫寛

あさの・ゆりこ 平成2（1990）年、宮城県生まれ。東北芸術工科大大学院修了。フィールドワークを通じ植物を題材とした作品を制作。

選評

植物と人間をフラットな関係に捉える

島敦彦（国立国際美術館長）

浅野さんの絵には植物や野菜が描かれ、何か文様のように絡み合って画面全体を覆い尽くし、躍動している。作品によく人物や手も描かれているが、それは植物と人間をフラットな関係に捉えているからだろう。

大東さんの作品は木炭一色による絵画で夜の光景が描かれ、白黒の階調が本当に美しい。その中に盆踊りをする人物が小さく描かれているが、風景を供養するという意味が込められている。

法廷画家でもある松元さんは痛ましい事件を題材に、事件自体をなぞるように描写するのではなく、現場に行き、そこで感じたことや周囲の風景といったものを1枚の版画に融合させている。

豊かな色彩でダイナミズムを感じる

建畠晳（草間彌生美術館長）

浅野さんの作品は一つ一つの植物が装飾的で様式化されている。アンチーム（親しさ）やヒューマンな雰囲気の中で人間と植物の結びつきを表現している。色彩も豊かでダイナミズムを感じる。

対照的に、大東さんは木炭でキャンバスに闇の光景とともに光の光景を描いている。モノクロだと一般的に禁欲的でクールな印象を受けるが、作品からは場所の記憶のようなものが宿っているように感じる。

松元さんは事件現場に出向き、そこで自分の自画像を描いている。一見、風景の中の人間の姿が描かれ、作品全体からは犯罪のなおぞましさは感じられないが、奇妙な感覚とともに何か不穏なものを感じる。

影の奥にあるものを表現

奨励賞 大東忍さん

街灯に照らし出された雪景色など、木炭で夜の風景を描き続けている。作品には盆踊りを踊る自身の姿を小さく描くことも。祖先を供養する盆踊りを踊ることで「風景を供養している」

作品を作るきっかけは、祖母の住む地域が限界集落になったことだ。「自分なりの方法で、その土地の痕跡を記録しようと思った」

その土地に出向いて撮った写真や動画のデータを基に描いている。「自分事として自分の身体を通して風景と交感し、土地の自然や人の営みを知りたい」

夜景を描くのは「影の効果」を狙ってのこと。「昼間は見えたものを、影がベールで覆っている。奥行きを描き尽くせなくても、実は奥に何かがあることを表現できるのが影の効果」

今後は、これまであまり描かなかった雪景色をもっと描きたいという。「東北に3年住んでいたが、雪はあまりにも壮大で美しくて、ドラマチック過ぎて描けないと避けていた」

しかし、「影が風景を包んでくれるように、雪も大きな布のように風景を包んでくれる。むしろ私が描くべき題材と思えるようになった」と、新たな創作意欲を見せた。

大東忍《不寝の夜》2025年 木炭、キャンバス 194×259cm 撮影：加藤健

だいとう・しのぶ 平成5（1993）年、愛知県生まれ。愛知県芸術大学院修了。過疎地や住宅街などの夜の風景を木炭で描く。

事件の当事者に寄り添う

審査員特別賞 松元悠さん

法廷画家の顔を持つ。裁判やニュースで扱われた事件などをモチーフに版画の一種、リトグラフで表現している。実際に現場に赴き、自身を事件などの当事者として描いた自画像とともに、そこで見た景色なども描き込んでいる。

漫画家を目指し、大学のオープンキャンパスに出かけたところ、たまたま版画コースの作品を見て、「こんな素晴らしい作品を作っている先輩方がいるなら、自分も何かいいものを作れるのでは」と平成23年、京都精華大芸術学部に入学。

松元悠《サラバ化物（大宮区、江戸川区、アフリカ）：やっぱりやめよう》2023年 リトグラフ、BFK紙 60×90cm

ニュースを題材にするきっかけは、大学で出会った同級生の存在だ。入学直前に東日本大震災が発生。「東北から来た子と震災に対する距離感がその出来事についてどう解釈し、どうすれば当事者に寄り添えるかをずっと考えた」

そして、「何か思いをせるということだけでも当事者の救いになり、自分自身の救いになるのではないか」という思いに至った。

作品に描き込まれた一つ一つに、背景やエピソードがある。キャプションパネルだけでは、説明しきれない情報量だ。「いろいろ試行錯誤している」という展示方法が目下の課題だ。

まつもと・はるか 平成5（1993）年、京都府生まれ。京都市立芸術大大学院修了。事件現場やその周縁での経験をもとに版画を制作。

推薦者（84人）

秋田美緒、浅川真紀、荒井直美、五十嵐卓、石倉敏明、石崎尚、磯部靖、一井義寛、植松篤、鵜尾佳奈、内田真由美、遠藤水城、大下裕司、O JUN、大槻晃実、大前勝信、岡里崇、小川敦生、小川希、尾崎信一郎、鍵岡正謹、勝山滋、加藤義夫、金鳳隆弘、亀海史明、岸本和明、菊地真央、北川フラム、木藤野絵、木原天彦、楠本智郎、工藤健志、黒河内卓郎、慶野結香、小金沢智、小原真史、小林公、小堀修司、小松崎拓男、近藤由紀、貴家映子、渋田見彰、渋谷拓、下村朝香、尺戸智佳子、新藤淳、杉山はるか、高田彩、瀧上華、立花由美子、田中龍也、筒井宏樹、出原均、土岐美由紀、鳥羽都子、中尾英恵、中西學、中山摩衣子、難波祐子、西山恒彦、野田尚稔、野地耕一郎、長谷川新、土生和彦、林寿美、原久子、原舞子、福田美蘭、藤元由記子、古川文子、保坂健二朗、堀元彰、桝田倫広、松岡剛、三井知行、宮井和美、宮武弘、毛利直子、森啓輔、山内舞子、山口裕美、山本麻友美、油井一八、横山由季子（敬称略、五十音順）

推薦された作家（72人）

浅野友理子、井澤茉莉絵、石神雄介、石川貴大、岩名泰岳、おおだいらまこ、大平由香理、岡優七、沖綾乃、小左誠一郎、鍵岡リグレ アンヌ、勝木有香、川内理香子、倉敷安耶、衣真一郎、近藤佳那子、近藤智美、齋藤春佳、齋藤零生、坂内直美、鮫島ゆい、設楽陸、庄司朝美、須貝旭、春原直人、ソー・ソウエン、sota、大東忍、平良優季、高田裕大、高橋侑子、田窪黨、谷保玲奈、團上祐志、ちょんしげ、都築崇広、坪本知恵、手嶋勇気、寺本明志、永沢碧衣、中田日菜子、新平誠洙、野原万里絵、橋本晶子、畑山太志、花房紗也香、東山詩織、平川恒太、福本健一郎、藤田美希子、松元悠、水上愛美、水上卓哉、水野里奈、水除琉聖、水戸部七絵、三宅佑紀、本山ゆかり、森千咲、森夕香、森本めぐみ、安井薫之介、谷中美佳子、山崎結以、楊博、油井祥子、横山奈美、米山祐生、李晶玉、Wako Ishiguro、渡部未乃、ほか1人（敬称略、五十音順）

「絹谷幸二芸術賞」とは

文化勲章受章者で昨年8月に死去した洋画家・絹谷幸二氏の若手美術作家を支援したいとの熱意のもと、令和5年に創設。第3回は、全国の美術館学芸員など美術関係者約270人に40歳以下の作家の推薦を依頼。推薦資料をもとに審査員の島敦彦氏、建畠晳氏が、大賞、奨励賞、審査員特別賞の各1人を選出。受賞者には賞金（大賞100万円、奨励賞50万円、審査員特別賞30万円）と副賞の画材が贈られた。

公式HP
https://kinutani-award.art/

主催：絹谷幸二芸術賞実行委員会、産経新聞社、公益財団法人絹谷幸二美術財団
共催：チャーム・ケア・コーポレーション
協力：サクラクレパス、ミキハウス